

鮑川西出B遺跡(第2次)発掘調査報告

1999・3

三重県埋蔵文化財センター

序

埋蔵文化財は、それぞれの地域そして我が国の歴史を明らかにする上での重要な歴史資料です。同時に、後世に残さなければならない私たち共通の大切な文化遺産でもあります。したがって可能な限り現状を保存してゆくことを大原則としておりますが、私たちの社会生活を向上させるための各種の公共事業もまた重要であることは言うまでもありません。そこで、どうしても現状保存の困難な部分については、発掘調査を実施し、記録の保存を図ってきているところであります。

ここに紹介致します「鮑川西出B遺跡」の発掘調査も、県営ほ場整備事業に伴って消滅する部分について止むなく実施されたものです。この発掘調査成果が、より多くの方面で活用されることを願って止みません。

発掘調査にあたっては、地元度会町在住の方々をはじめ、度会町産業課、度会町教育委員会、県農林水産商工部から多大な御協力をいただきました。心より感謝申し上げます。

平成11年(1999)3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 大井與生

例　　言

1. 本書は、下記の遺跡の発掘調査報告書である。
　　はいかわにして びいいせき
　　鮑川西出B遺跡（第2次）（度会郡度会町鮑川字西出所在）
2. 本調査は、平成10年度県営ほ場整備事業（中川地区）に伴って実施したものである。
　　調査にかかる費用は、その一部を国庫補助を受けて三重県教育委員会が、他を三重県農林水産商工部が負担した。
3. 調査は、平成10年度に行った。調査の体制は以下の通りである。
　　調査主体：三重県教育委員会
　　調査担当：三重県埋蔵文化財センター（調査第一課）
　　　　第一係長 竹内英昭（調整）、主事 坂倉一光
　　　　主事 奥野 実
　　整理担当：三重県埋蔵文化財センター 調査第一課・資料普及グループ
4. 調査にあたっては、度会町在住の各位、度会町教育委員会、度会町産業課および県農林水産商工部農業基盤整備課、南勢志摩県民局農林水産商工部にご協力をいただいた。
5. 本書の執筆は、坂倉、奥野が行い目次及び文末に明記した。編集は坂倉が担当した。
6. 当地域の磁北は真北に対し $6^{\circ} 20'$ 西偏している。（平成6年度、国土地理院）
　　当報告書では、磁北で測量したものを真北に換算して用いた。
7. 写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。
8. 当報告書での用語は、以下の通り統一した。
　　つき … 「坏」「杯」があるが、「杯」を用いた。
　　わん … 「椀」「碗」等があるが、「椀」を用いた。
9. 当報告書で用いた遺構番号は、通番となっている。（以下に言う p i t を除く）また、番号の頭には、各遺構の性格により以下の略記号を付けた。
　　S B : 掘立柱建物 S K : 土坑 p i t : 柱穴、小穴
10. 当発掘調査による図面・写真等の記録類並びに出土品は三重県埋蔵文化財センターに於いて保管している。
11. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
　　各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I	前　　言	（坂倉一光）	1
II	位置と歴史的環境	（奥野　実）	2
III	調査の成果～層位と遺構～	（坂倉一光）	7
IV	調査の成果～遺物～	（坂倉一光）	10
V	結　　語	（坂倉一光）	13

挿図目次

第1図	遺跡位置図		3
第2図	遺跡地形図		5
第3図	調査区位置図		5
第4図	遺構平面図・土層断面図		6
第5図	S B 45平面図・断面図		7
第6図	S B 46・47平面図・断面図、S B 46土器出土状況図		8
第7図	S K 36～S K 43平面図・断面図		10
第8図	出土遺物実測図		11

表目次

第1表	遺構観察表		9
第2表	遺物観察表		12

図版目次

図版1	調査区全景、調査区西半分		14
図版2	S B 45、S B 46、S B 47、土器出土状況、S K 36、作業風景		15
図版3	出土遺物		16

I 前 言

1 調査の契機

鏡川西出B遺跡は、県営は場整備事業（中川地区）および県営ふるさと農道整備事業（度会北部地区）に係る分布調査（平成6年）によって発見された。平成8年1月29日に行った試掘調査の結果をふまえて、保存不可能な部分について平成9・10年度に本調査を実施することにした。

平成9年度には、ほ場整備部分と農道整備部分の合わせて2,200m²について調査を実施した。その結果、遺構として鎌倉時代の土坑や室町時代の掘立柱建物や井戸が確認された。遺物として土師器鍋や山茶碗等が出土した。また、旧石器時代の剥片も出土した。平成10年度には、鏡川西出B遺跡の西端部分2,250m²について調査を実施した。

2 調査の経過

(1) 調査経過概要

本年度の調査は、6月8日から遺構面に影響のない範囲で重機による表土の除去を始め、6月25日から作業員を入れての調査となった。このころから晴天が続き、遺構の検出及び掘削は順調に進み、8月3日には遺構掘削は完了した。その後、遺構写真撮影および遺構実測を行い、8月25日にすべての現地作業を終了することができた。調査に参加していただいた地元度会町在住の方々には、連日の猛暑の中、たいへん御尽力をいただいた。ここに御芳名を記して、心からの御礼を申し上げたい。

大西一枝、大西春子、北村昭輔、京橋初代、京橋六郎、世古暁美、世古あさ子、世古幸子、世古進、世古三枝、竹村シゲ、田中ちよ、永木茂子、中世古喬子、中世古貞次、馬瀬章、馬瀬妙子、松井サワ、松井貞子（五十音順、敬称略）

(2) 調査日誌（抄）

5月27日 現地協議

6月 8日 重機による表土除去開始。もと傾斜地で盛土量が多い上、梅雨時で難行し、表土除去に二週間を要した。

- 6月25日 作業員初日。小雨。テント設営、ベルトコンベアー配置、草刈りで作業終了。
- 6月26日 検出・掘削開始。遺物少ない。東西に長い長方形の調査区を東から開始。
- 6月29日 晴れが続き、連日猛暑。調査区東側で南東隅に土坑を伴う掘立柱建物1棟確認。
- 7月 7日 調査区中央部で陥り穴状土坑？掘削。遺物が無いので時期を断定できず。
- 7月 8日 調査区中央部で石巖。剝片が出土。
- 7月13日 調査区中央部で南東隅に土坑を伴う掘立柱建物2棟検出。
- 7月29日 調査区西側の検出を進める。縄文土器が出土。
- 8月 3日 遺構の掘削を完了。
- 8月 4日 調査区清掃後、写真。
- 8月 5日 発掘用具片付け。午後、地元向け現地説明会を実施。20人の参加を得た。
- 8月 6日 遺構実測を開始。
- 8月 8日～8月16日まで現地調査員、夏休み。
- 8月17日 遺構実測を再開。21日ですべて実測終了。この頃、連日雷雨。
- 8月24日 道具撤収。
- 8月26日 調査区引き渡し。
- (3) 文化財保護法等にかかる諸通知
- 文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官等あてに行っている。
- ・法第57条の3 第1項（文化庁長官あて）
平成10年5月25日付け農基第78-1号（県知事通知）
 - ・法第98条の2 第1項（文化庁長官あて）
平成10年6月22日付け教生第490号（県教育長通知）
 - ・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（伊勢警察署長あて）
平成10年10月5日付け教生第2-5号（県教育長通知）

（坂倉一光）

II 位置と歴史的環境

鯨川西出B遺跡は、三重県度会郡度会町に所在する。付近は、紀伊山脈の大台山系を源に発する、宮川によって形成された河岸段丘上にあたる。地質的には、結晶片岩や千枚岩などの変成岩から成る、三波川帯に属している^⑤。

鯨川西出B遺跡(1)は、宮川中流域北岸の河岸段丘中面上に立地する。標高は約40mで、現況は水田である。

当遺跡では、平成9年度に発掘調査(第1次調査)が実施され、旧石器時代の石核や割片が出土し、鎌倉時代の土坑1基や室町時代中葉以降の掘立柱建物2棟・井戸2基・溝6条・土坑8基が見つかった。この内には、掘立柱建物に付属する土坑と井戸が検出されており、1軒の屋敷地を示していたと考えられている^⑥。

ここでは、今回の調査に関連する宮川中流域(行政区の度会町内城田地区を中心に)の縄文時代・歴史時代の遺跡を中心について概説してみる。

旧石器時代の遺跡としては、当遺跡のほかに、上ノ垣外遺跡⁽²⁾や山崎遺跡⁽³⁾がある。なかでも、山崎遺跡からは、良好な石器接合資料が得られている。

縄文時代については、多くの遺跡が確認されている。遺跡の分布を見てみると、宮川右岸に大規模な遺跡が存在する特徴があげられる。次に、町内の主な遺跡を宮川を刿って見ていきたい。

まず上ノ垣外遺跡がある。当遺跡からは、発掘調査によって高山寺式の集積炉が數カ所確認されている。ほかに中期末や後・晚期の土器・異形局部磨製石器をはじめ多くの石器が出土している。次に、山崎遺跡からは、発掘調査によって前期・中期末の土器や石器などが出土している。下久具万野遺跡(4)は、2000点の石器をはじめ多数の石器や土器が表採されている。早期から晚期までの長期にわたる遺跡が存在している^⑦。西林遺跡(5)では、早期押型文土器や石器など出土している。森添遺跡(6)からは、発掘調査によって後期後葉から晚期初頭の堅穴住居などが検出され、朱が付着した土器や御物石器など

多数の遺物が出土した。中期から存在し、後期の拠点集落と考えられ、晚期まで存続する^⑧。麻加江柄垣内遺跡からは、大川式の土器が多数表採されている^⑨。そのほか時期は不明であるが、ネギタ遺跡(7)や総門遺跡(8)・廣切遺跡(9)・向村遺跡(10)・坂井北遺跡(11)・アラシ遺跡(12)などから土器が確認されている。また、鯨川西出B遺跡の東方の鯨川遺跡(13)でも、石器が表採されている。

弥生時代になると、遺跡数は希薄となり、上ノ垣外遺跡(後期)と森添遺跡(前期)で確認されただけとなっている。

続く古墳時代については、上ノ垣外遺跡から前期の堅穴住居が見つかったほかは、小規模な古墳が存在するだけとなっている。

次に歴史時代について見てみると、古代においては、城田郷に属している。上久具には延喜式内社「久具都比売神社」が存在している^⑩。また、上ノ垣外遺跡からは、平安時代末の掘立柱建物が見つかっている。

鎌倉時代以降の遺跡については、多数確認されている。

中世には、「葛原御園」^⑪、「大橋御園」、「久具御厨」、「摩加江御園」、「岩坂御園」、「立花御園」^⑫の伊勢神宮領の存在が知られている。

南北朝時代に入ると、現度会町内には、南朝方の拠点(一之瀬城)と北朝方の拠点(法楽寺)が存在し、両朝のそれぞれの勢力が攻め合う場となった。室町時代になると、北畠氏の支配となった。戦国時代には、蒲生氏郷や牧村利負・稻葉藏人道通・藤堂高虎の所領に属した。

江戸時代に入っては、紀州藩領となった。また、当時の当地域の主要道であった熊野脇街道は、現在の県道38号線(伊勢大宮線)に沿って通っていた^⑬。

当遺跡の存在する鯨川地区については、室町時代に成立したといわれている『類聚雜要抄』に「鯨川御厨」の記述がある。当遺跡の周辺では、鯨川西出A遺跡(14)で土師器片が、鯨川経塚(15)からは、

一石一字経石が表採されている。それぞれは、鎌倉時代以降と江戸時代の遺跡と考えられている。南船川城跡（16）は規模 $35m \times 50m$ の曲輪をもち、土壠状のものがわずかに残っている⁹⁾。

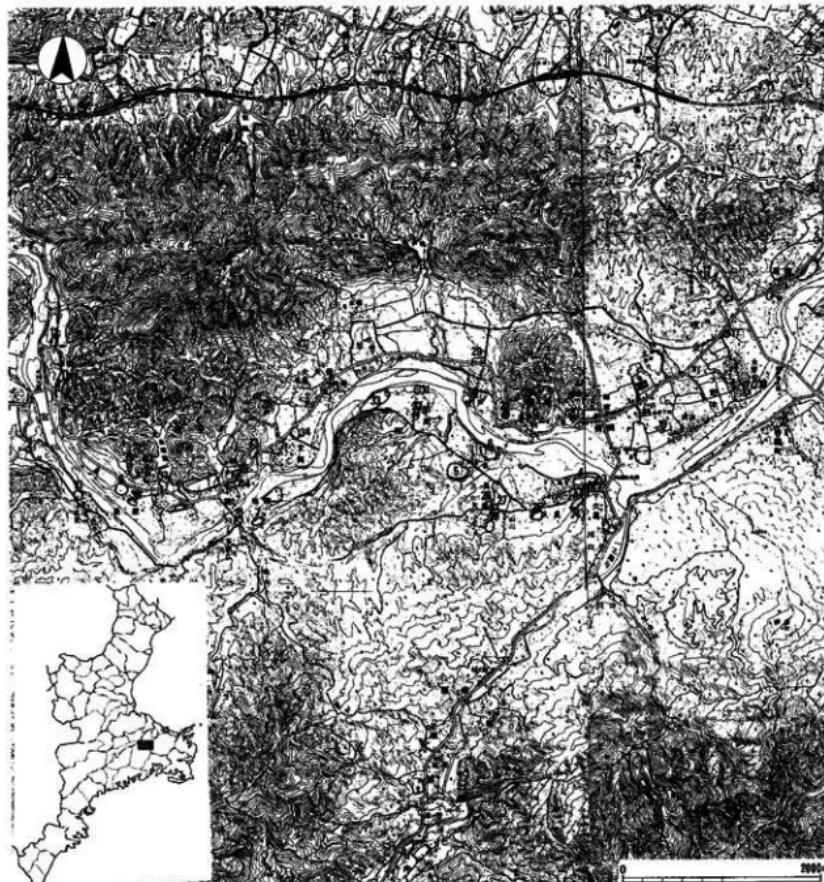
以下、各大字ごとに宮川を溯って主な鎌倉時代以降の遺跡について見ていきたい。

まず、葛原地区では、上ノ垣内遺跡から土師器鍋や山茶碗などが出土している。

次に、大野木地区では、山起し遺跡（17）や備後

垣内遺跡（18）・笹原遺跡（19）から土師器片が表採されている。

棚橋地区では、平安時代に大中臣氏の氏寺として建立された蓮華寺があり、鎌倉時代には大神宮法楽寺と寺号を改め、南北朝時代には両朝の拠点となつた⁸⁾。城山城跡（20）は、東側に掘切状の遺構が残っていた。蓮華寺城跡（21）は主郭 $17m \times 2m$ で、尾根上に掘切がある。小堀塚（22）では、発掘調査によって墓地とその階段部が見つかり、五輪塔や藏骨



第1図 遺跡位置図 (1 : 50,000、国土地理院『国東山』『伊勢』1 : 25,000から)

器に転用された土師器鍋、その蓋として使用された山茶椀が出土した⁹。

下久具地区では、山崎遺跡から鎌倉時代以降の掘立柱建物や土坑などが見つかっている。前村遺跡(23)や油屋前遺跡(24)・宮前遺跡(25)からは土師器片が表採されている。

上久具地区では、発掘調査によって寺垣内遺跡(26)から室町時代中頃の掘立柱建物5棟や溝・土坑などが見つかっている¹⁰。東畠中世墓(27)からは約60基の埋葬施設が検出され、藏骨器に転用された土師器鍋や陶器壺が出土し、室町時代中頃を中心に、江戸時代にまで及ぶ遺跡と考えられる¹¹。山川城跡(28)は、規模60m×80mの曲輪をもち、2郭と空堀が存在していた。

牧戸地区では、土師器片が表採された大西遺跡(29)と、北畠氏の家臣牧戸与五郎の居城の牧戸城跡(30)があった。

田間地区では、やんげ遺跡(31)からは土師器片が、小広木遺跡(32)からは土師器片や山茶椀片が表採されている。前山遺跡(33)では、立会調査で

註

- ① 建設省三重工事事務所『宮川流域の自然と文化』(1988年)の6頁。
- ② 西村美幸『範川西出B遺跡(第1次)発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター、1998年)。
- ③ 註の付されていない遺跡の概要については、「度会町遺跡台帳」に基づいている。
- ④ 御村精治『上ノ垣外遺跡発掘調査概報』(度会町遺跡調査会、1991年)。以下、同遺跡の調査内容については、本書による。
- ⑤ 松葉和也『山崎遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター、1997年)。以下、同遺跡の調査内容については、本書による。
- ⑥ 岡田登『下久具万野遺跡とその遺物』(『歩跡』第2号皇學館大学考古学研究会、1972年)。
- ⑦ 田村陽一『森派遺跡発掘調査概報I』(度会町遺跡調査会、1987年)。奥義次『森派遺跡発掘調査概報II』(度会町遺跡調査会、1988年)。
- ⑧ 岡田登『麻加江柄垣外遺跡とその遺物』(『歩跡』第3号、皇學館大学考古学研究会、1976年)。

土師器片が出土している。

大久保地区では、総門遺跡から土師器片や山茶椀片が表採されている。

立岡地区では、ちかばね遺跡(34)から土師器片が表採されている。立岡城跡(35)は規模25m×15mの曲輪をもち、空堀や土塁が存在している。

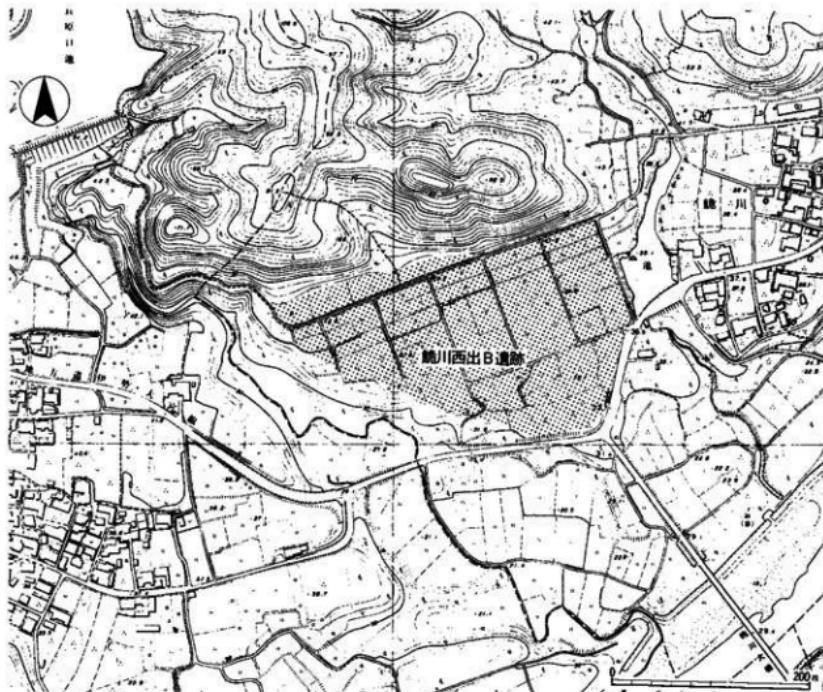
当津地区では、宮西遺跡(36)から土師器片が表採されている。

長原地区では、野田遺跡(37)から発掘調査によって、鎌倉時代初め頃の溝や安土桃山時代の掘立柱建物などが検出されている¹²。研山遺跡(38)でも鎌倉時代初め頃の土坑や安土桃山時代の柱列などが見つかっている¹³。大山中世墓(39)では、五輪塔や土師器が出土している。長原城跡(40)は規模40m×35mの曲輪をもち、南東側に掘り切りが存在している。

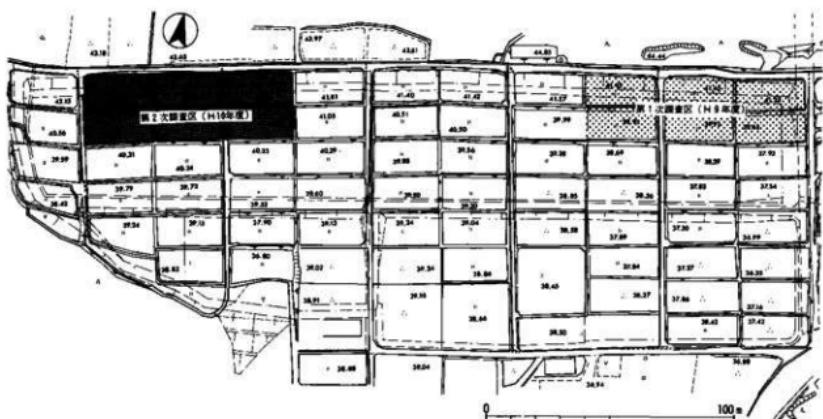
以上のように、遺跡は現在の各大字ごとに存在しており、現在の集落の範囲と重なっているものもあると思われる。また、当遺跡周辺は、中世以来連続と集落が営まれてきたと考えられる。

(奥野 実)

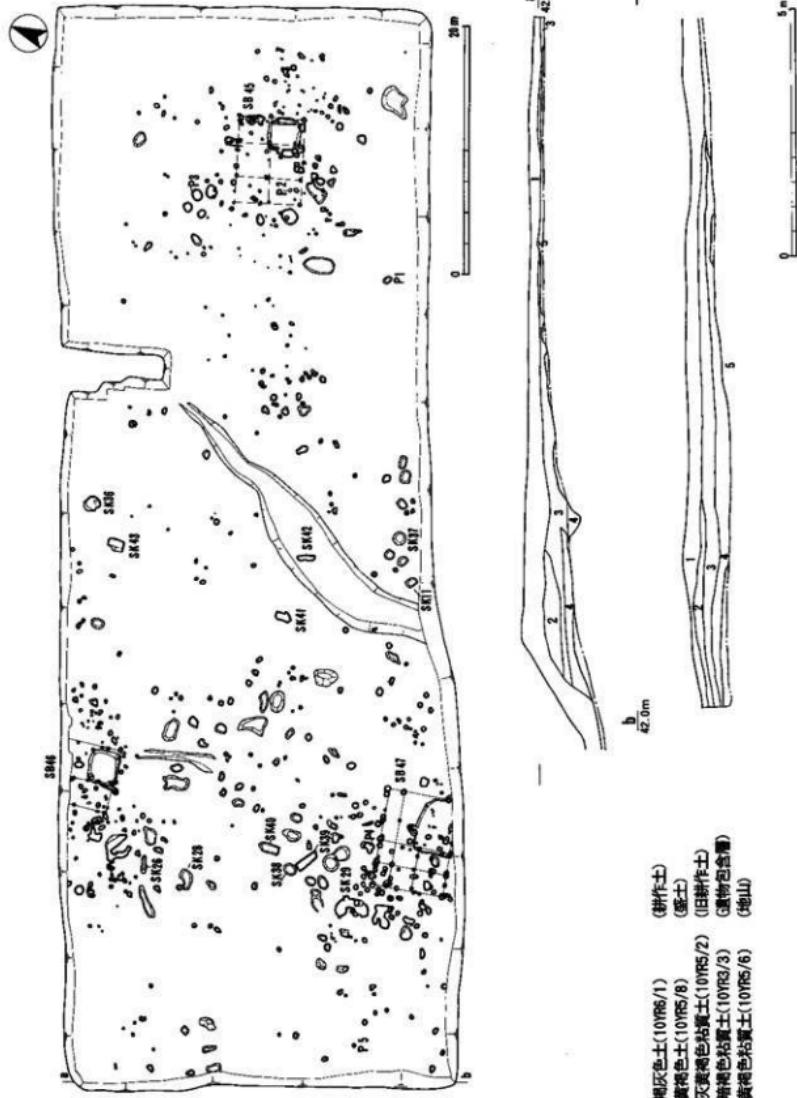
- ⑨ 斎藤郁雄『久々都比賣神社』(『式内社調査報告』第六卷、皇學館大学出版部、1990年)。
- ⑩ 『外宮神領目録』(群書類從本)の499頁。
- ⑪ 『神鳳鈔』(群書類從本)の301頁。
- ⑫ 三重県教育委員会『歴史の道調査報告書I—熊野街道—I』(1981年)。
- ⑬ 三重県教育委員会『三重の中世城館』(1976年の138~140頁。以下、城跡(中世城館)の概要は本書による。
- ⑭ 小島鉄作『大神宮法楽寺及び大神宮法楽寺の研究』(『伊勢神宮史の研究』、吉川弘文館、1990年)。
- ⑮ 中西健『小姫塚発掘調査報告』(度会町遺跡調査会、1982年)。
- ⑯ 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報』12(1982年)の56頁。
- ⑰ 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報』12(1982年)の55・56頁。
- ⑱ 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財年報8』(1997年)の32頁。
- ⑲ 前掲⑯と同じ。



第2図 清跡地形図(1:5,000)



第3図 調査区位置図 (1:2,000)



第4図 透構平面図(1:400)及び土層断面図(1:100)

III 調査の成果

～層位と遺構～

1 調査の方法

平成10年度は、遺跡西端の2,250m²を調査した。調査区の現況は、もと傾斜地であった所に小区画のほ場整備が行われた水田である。棚田状の上下2段×3列の6筆分を対象とした。

調査の基準点は、第1次調査の基準点の延長線上にある2点を使用した。調査区内は、設定された基準点をもとに4m方眼を切り小地区を設定した。東から西へアルファベットを、北から南へ数字の番号を与え、桁目の北西隅の交点をその地区的符号とした。

2 基本層序

調査区は、丘陵端部の傾斜地で多量の削平および盛土が行われ、現状では段差のある水田になっている。耕作土と包含層を除去した結果、上下で約1.5mの比高のある傾斜地を検出した。基本層序は、

上から褐色の耕作土、一部で地山を削り取った黄褐色の盛土、その下に旧耕作土と考えられる灰黃褐色粘質土がみられる。地山まで削り取られた所以外の場所には、暗褐色粘質土の遺物包含層が存在する。その下に、黄褐色粘質土が地山としてある。この層の上面を検出面とした。

3 遺構

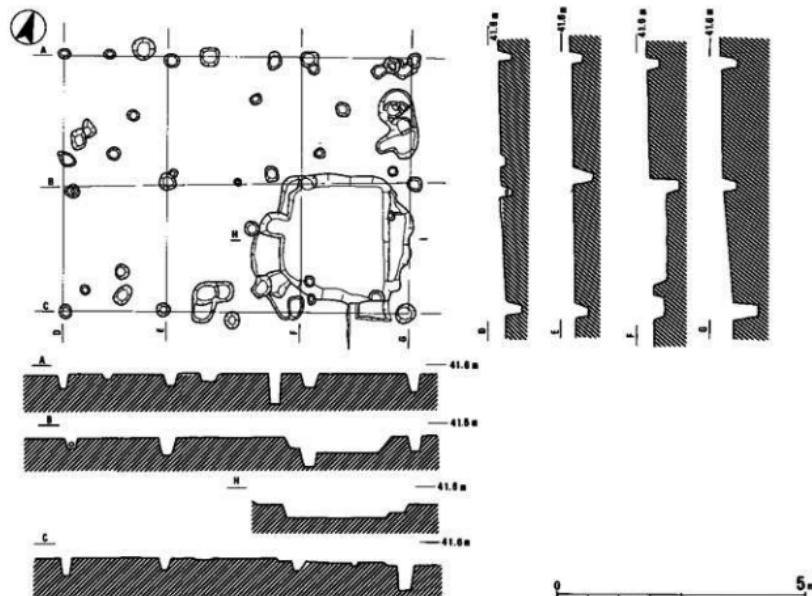
調査の結果、おもに室町時代の遺構を確認した。

以下に各遺構についての特徴を述べる。

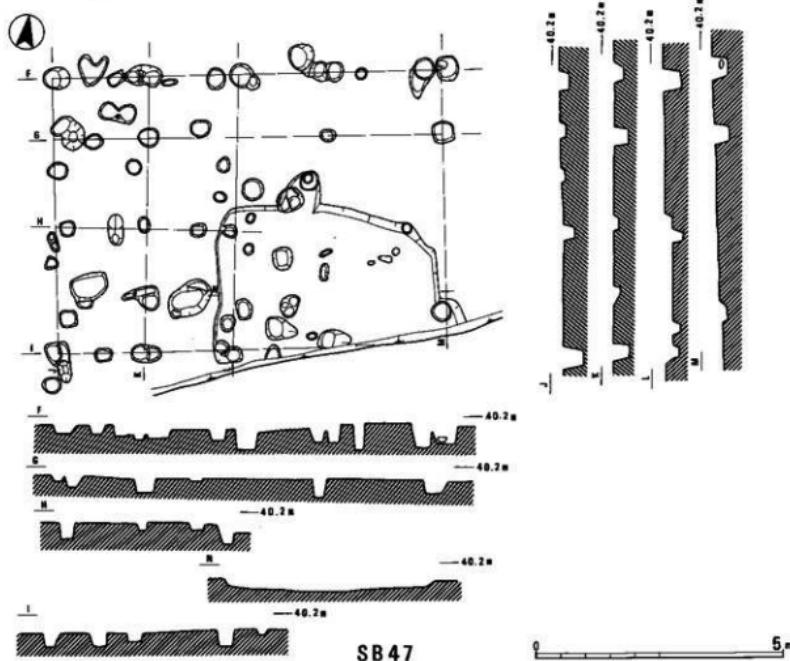
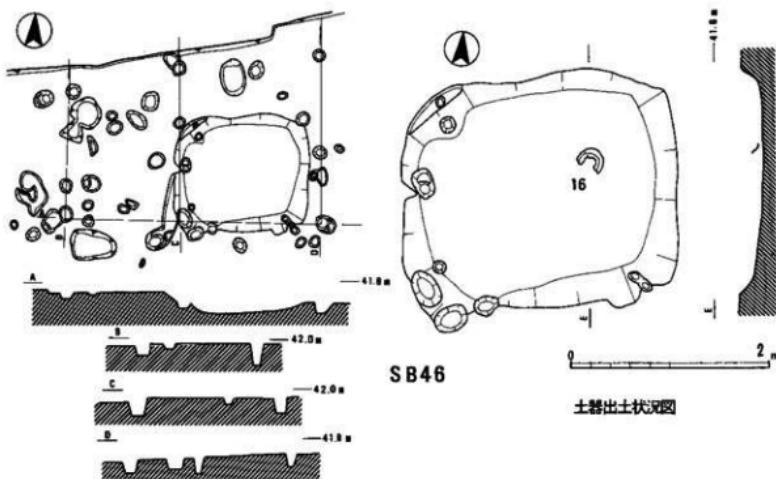
(1) 室町時代末の遺構

掘立柱建物

S B 45 桁行3間(東から2.1m+2.8m+2.1m=7.0m)×梁行2間(2.5m×2=5.0m)の総柱建物で、E18° Nの東西棟である。柱穴の中には、根石を伴うものもある。柱穴から土師器鍋・土師器小皿が出



第5図 S B 45平面図・断面図 (1 : 100)



第6図 SB46・47平面図・断面図 (1:100)、SB46土器出土状況図 (1:50)

土した。

南東隅の間には土坑があり、柱穴との位置関係からこの土坑は建物に伴うものと考えられる。1間×1間の範囲に収まり、一辺約2.5mの方形を呈し、深さは25cm、底面はほぼ平らである。土師器皿(6)・土師器鍋(9)(10)・縁軸小皿(7)・おろし皿(8)・練り鉢(11)が出土した。

S B 46 衍行3間以上(南から1.3m+2.0m+0.7m以上=4.0m以上)×梁行2間(東から2.9m+2.1m=5.0m)の総柱建物で、N 3° Wの南北棟である。柱穴からの遺物は確認できなかった。調査区の北半分は水田を造る際にかなり地山が削平されているため、今回の調査時点では一部の柱穴は遺存していなかった。

南東隅の間には土坑があり、柱穴との位置関係からこの土坑は建物に伴うものと考えられる。一辺約2.5mの方形を呈し、深さは約40cm、中央がやや壅む。

土師器皿(13)・羽釜(14)・土師器鍋(16)・加工円盤(15)が出土した。

S B 47 身舎の衍行4間(東から2.2m+1.8m+1.8m+1.8m=7.6m)×梁行2間(南から2.6m+1.8m=4.4m)である総柱建物で、E 11° Nの東西棟である。

北面は扇であり、柱間は1.2mである。柱穴の中には、根石を伴うものもある。柱穴からは土師器鍋や羽釜・土師器皿が出土した。

南東隅の間には土坑があり、柱穴との位置関係からこの土坑は建物に伴うものと考えられる。調査区外へのびるが、2間×2間の範囲に収まり、4m×3

mの長方形を呈し、深さは約35cm、底部はほぼ平らである。土師器皿(17)(18)・茶釜(19)・土師器鍋(20)が出土した。

(2) 時期不明の遺構

土坑

下記のいずれの土坑からも遺物の出土は認められず遺構の所属期及び性格の確定はできなかった。

S K 36 調査区中央部北寄りの円形土坑である。

深さは、約60cmである。底面に径6cm程の小穴を5個確認した。土坑の形態における類例⁸との比較及び今回の調査区から石器・繩文土器が出土していることを考え併せると繩文時代のいわゆる「陥し穴」の可能性もある。

S K 37 調査区中央部南寄りの円形土坑である。

約150cmまで掘り下げたが、完掘を断念した。井戸である可能性もある。

S K 38 調査区西寄りの円形土坑である。底に20cm程の石があった。深さは、約70cmである。

S K 39 調査区西寄りの長方形土坑である。深さは、約110cmである。

S K 40 調査区西寄りの長方形土坑である。深さは、約90cmである。

S K 41 調査区中央部の不定型土坑である。深さは、約100cmである。

S K 42 調査区中央部の長方形土坑である。深さは、約60cmである。

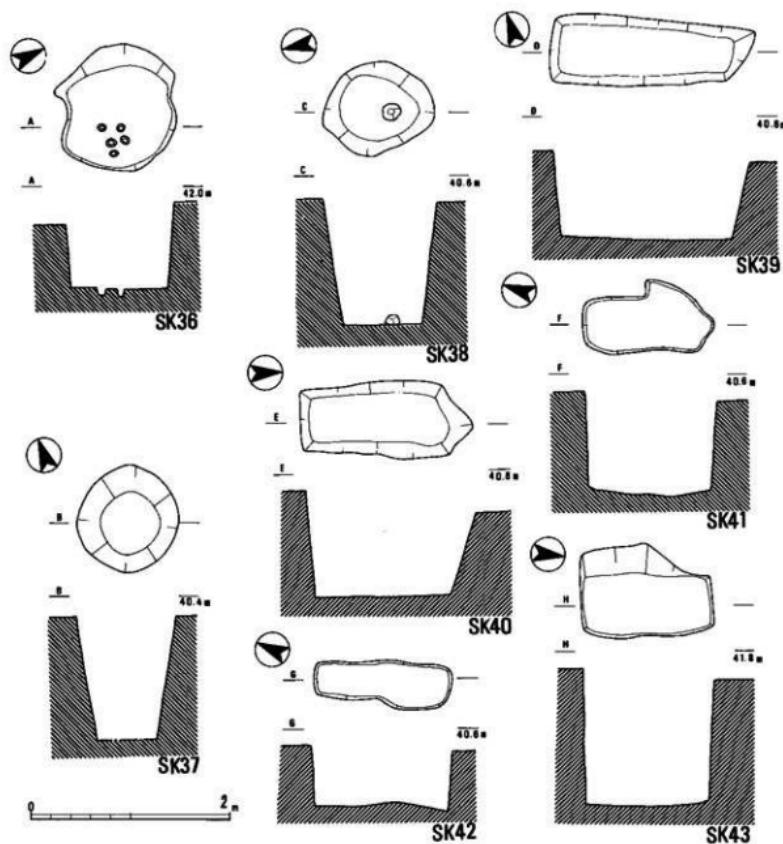
S K 43 調査区中央部北寄りの長方形土坑である。深さは、約120cmである。

(坂倉一光)

掘立柱建物

遺構名	規 模	総柱・ 衍行×梁行	柱 性の別	柱間(東から) 柱間(南から)	棟方 向	柱穴掘形		時 期	備 考
						形 状	径(cm) 深さ(cm)		
S B 45	3間×2間	総柱	衍行	7.0 2.1+2.8+2.1	東西	E 18° N N 3° W	円形 30cm~ 40cm 30cm~ 40cm	15世紀末	1間×1間の南東隅 土坑を伴う
S B 46	3間以上×2間	総柱	4.0以上	5.0 南から1.3+2.0 東から2.9+2.1	南北	円形 30cm~ 40cm 30cm~ 40cm	15世紀末	南東隅土坑を伴う	
S B 47	身舎4間×2間 北面附4間×1	総柱	7.6 1.8+1.8+1.8	2.2+ 5.6 2.6+1.8+幅1.2	東西	E 11° N 東西	円形 30cm~ 40cm 30cm~ 40cm	15世紀末	2間×2間の南東隅 土坑を伴う

第1表 遺構観察表



第7図 SK36～SK43平面図・断面図 (1:50)

IV 調査の成果 ~遺物~

今回の調査では総量でコンテナパット15箇程度の遺物が出土した。以下、各遺構出土遺物を中心に概述する。なお、測定値等は遺物観察表を参照されたい。

1 繩文時代の遺物

第1次調査においては、10点の石核や剝片の出土があった。第2次調査においては、計5点の石器が出土した。以下、3点のみ図示して記述する。

(1)は、サヌカイト製の石鎌である。四基無茎鎌で側縁はわずかに内湾し、先端近くで尖るために細身の五角形状をなす。片面に一次削離面をわずかに残す。(2)は、チャート製のRFである。不定型の剝片の左側縁に細かい調整を施す。(3)は、チャート製の石核である。明確な作業面は残っておらず、全体の性状から石核と判断したが、敢えていえば残核ということもできる。

p i t 5出土の縄文土器(4)は、中期末の深鉢のキャリバー状口縁の破片である。断面カマボコ状の凸帯の区画の中に太いヘラによる斜線が密に施されている。厚手で小石を多く含んでいる。

2 鎌倉時代の遺物

(1) p i t 1出土の遺物

土師器皿(5)が出土した。

3 室町時代中葉以降の遺物

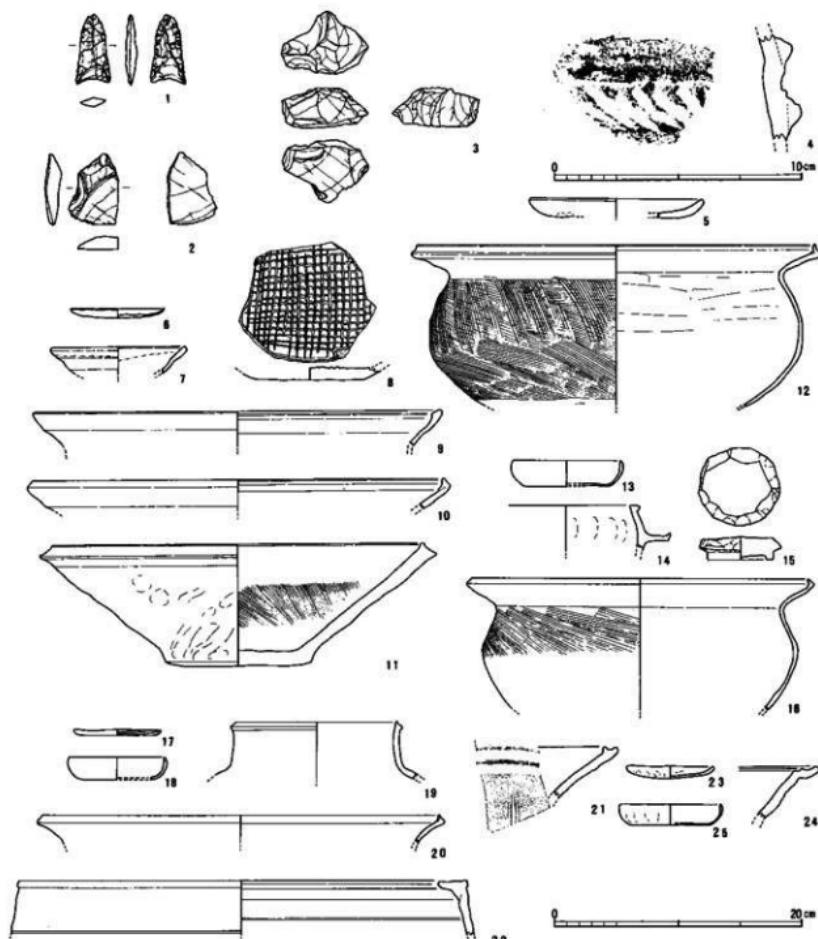
(1) S B 4 5出土の遺物 (6~11)

土師器皿(6)は、伊藤裕偉氏による分類⁶のA系統に属するものである。

土師器鍋(9)は伊藤編年⁶の第3段階b型式に、土師器鍋(10)は伊藤編年の第4段階c型式に相当する。

縄釉小皿(7)は、縁に鉄釉が施されたもので、古瀬戸編年⁶の後IV期ごろのものである。

(8)は、卸皿の底部である。



第8図 出土遺物実測図 (1~4は1:2、その他は1:4)

練鉢(11)は、15世紀代の常滑産のものと思われる。

(2) S K 11出土の遺物 (12)

土師器鍋(12)は、伊藤編年の第4段階c型式に相当する。

(3) S B 46出土の遺物 (13~16)

土師器皿(13)は、B系統に属するものである。

土師器鍋(16)は、伊藤編年の第4段階b型式に相当する。

羽釜(14)も同時期のものであると思われる。

(15)は、青磁碗の底を利用した加工円盤である。

(4) S B 47出土の遺物 (17~20)

土師器皿(17)はA系統、(18)はB系統に属するものである。

土師器鍋(20)は、伊藤編年の第4段階b型式に相当する。茶釜(19)も同時期のものであると思われる。

(5) S K 26出土の遺物

摺鉢(21)は、古瀬戸編年の後Ⅳ期に相当する。

(6) p i t 2出土の遺物

羽釜(22)は、15世紀前半のものと思われる。

(7) p i t 3出土の遺物

土師器皿(23)は、A系統に属するものである。

(24)は、折縁深鉢の口縁部である。内外面に釉が施されている。

(8) p i t 4出土の遺物

土師器皿(25)は、B系統に属するものである。

(坂倉一光)

目 次 登 録 番 号	器 種	准 備	測 定 値 (cm) 土 上 部 高 さ 厚 さ 底 径 底 高	石 材					
1 000-02	石 瓢	M - 3 U - 26 S K 26	2.76 2.84 1.63	1.36 1.96 3.45	0.41 0.66 2.53	1.3g 3.5g 10.8g	セスカイト チャート		
2 000-03	石 瓢	U - 7 S N 29	-	-	-	-	-		
目 次 登 録 番 号	器 種	測 定 値 (cm) 土 上 部 高 さ 厚 さ 底 径 底 高	調 整 技 法 の 特 徴	地 土	素 成	色 調	残 存	備 考	
4 005-04	陶 瓢	W - 7 p i t 5	- -	-	ナデ粘付合子-凸面削面に斜め(ヘラ)	やや粗	良	淡黄	口縁付近
5 007-04	土師器 皿	H - 7 p i t 1	13.5	-	1.6 内面ナデ、U輪部ヨコナデ、 外表面サエ	やや粗	良	にぶい緑	1 / 8
6 001-03	土師器 皿	S - 5 S B 45	7.4	-	0.8 内面ナデ 外表面クロナデ U輪部削除	やや粗	良	浅黄緑	1 / 3
7 002-02	埴輪小皿	S - 5 S B 45	10.6	-	内面ナデ	粗	良	口縁1/4	
8 002-01	知 肋	S - 5 S B 45	-	8.6	外表面クロナデ 底部切り直し	密	良	にぶい黄緑	底部のみ
9 002-03	土師器 皿	E - 5 S B 45	33.0	-	内外面クロナデ	やや粗	良	浅黄緑	口縁一部
10 001-02	土師器 皿	E - 5 S B 45	33.0	-	内外面ヨコナデ	やや粗	良	にぶい黄緑	口縁一部
11 001-01	陶器 深鉢	E - 5 S B 45	29.8 11.1	10.0	内面ナケ後ナデ、U輪部ヨコナデ、 外表面サエヨコナデ	やや粗	良	船底:褐灰 表面:にぶい赤褐色	1 / 2
12 003-03	土師器 皿	N - 8 S K 11	32.2	-	内面ナデ、口輪部ヨコナデ、 外表面シケ	密	良	にぶい緑	口縁一部 全体1/4
13 004-07	土師器 皿	R - 3 S B 46	8.6	-	2.0 内面ナデ、外表面オサエ、 底部ナデ後ナデサエ	密	良	浅黄緑	1 / 3
14 004-01	土師器 皿	R - 3 S B 46	-	-	内面ナデ、口輪部ヨコナデ	密	良	浅黄緑	口縁一部
15 004-05	青磁碗	R - 3 S B 46	-	-	6.5 内面ナクロナデ・黒輪 外表面ナクロナデ・削り出し両台・黒輪	密	良	胎色:緑 裏地:灰白	底部保存 加工丹波とし て再利用
16 005-01	土師器 皿	R - 2 S B 46	17.2	-	内面ナキナデ、口輪部ヨコナデ 外表面シケ	やや粗	良	にぶい黄緑	口縁1/2
17 004-09	土師器 皿	S - 9 S B 47	7.0	-	内面ナデ 外表面オサエ	やや粗	良	淡黄	2 / 3
18 004-08	土師器 皿	S - 9 S B 47	7.8	-	内面ナデ 外表面オサエ	密	良	浅黄緑	口縁1/2
19 004-02	土師器 皿	S - 9 高茎 S B 47	13.0	-	内面ナデ、口輪部ヨコナデ 外表面ナデ	やや粗	良	浅黄緑	口縁一部 外面保存
20 004-03	土師器 皿	S - 9 S B 47	8.4	-	1.5 内外面ヨコナデ 内面底面～外表面底部ヨコナデ 外表面底面オサエ	密	良	淡黄	口縁一部
21 003-02	陶器 深鉢	U - 3 S X 26	-	-	内面ナクロナデ 横目(1單位4本) 外表面ナクロナデ	密	良	内面:にぶい緑 外表面:にぶい赤褐色	小片
22 007-01	土師器 皿	G - 5 p i t 2	-	-	内面ヨコナデ 外表面ヨコナデ	粗	良	灰白	小片
23 006-07	土師器 皿	G - 4 p i t 3	7.0	-	1.0 内外表面ナデ・オサエ	ほぼ密	良	浅黄緑	底部保存
24 007-03	陶器 折縁深鉢	G - 4 p i t 3	-	-	内面ナクロナデ 高台取り付け後ナデ 底部ナデ	密	良	胎色:灰オーラブ 裏地:にぶい黄	口縁一部
25 006-06	土師器 皿	S - 8 p i t 4	8.0	-	1.7 内面ナデ・オサエ 外表面ナデ・オサエ	ほぼ密	良	浅黄緑	1 / 3

第2表 出土遺物観察表

V 結語

今回の調査では、縄文時代の遺物及び中世の遺構・遺物が確認できた。以下、中世の遺構、特に南東隅に土坑を伴う掘立柱建物について若干の検討を行い、まとめにかえたい。

当遺跡で確認された3棟の南東隅に土坑を伴う掘立柱建物は、それぞれの土坑から出土した土師器鍋から、15世紀末のものであると考えられる。土坑を伴う掘立柱建物は、三重県内の発掘調査においては、12世紀後半から13世紀にかけてのものが多く、14世紀以降は急速に減少し、14世紀後半以降のものはほんの数例しか検出されていないのが現状である。15世紀末の発掘調査例は現時点でも最も新しい時期の資料となる。ただ、このことは、土坑を伴う掘立柱建物が急速に消滅していくというより、室町時代の集落遺跡の発掘調査例が少ないと起因すると思われる。その後、時代は下って近世以降の民家

で土間の南東隅の一角に馬屋を設ける形態は全国各地で確認されている。三重県教育委員会の1973年の古い民家の間取りに関する調査でも、一般農家において南東隅馬屋が相当数確認されている。しかし、この形態の家屋と発掘調査例として12世紀後半から13世紀にかけてピークをむかえる南東隅に土坑を伴う掘立柱建物が、直接的に結びつくかどうか現在のところ確証には至っていない。14世紀以降の資料が少ないためである。両者がいかにつながるかという問題の究明には、室町時代以降の集落遺跡の発掘調査による資料の蓄積が重要となる。

当遺跡の発掘調査は、つい最近まで見ることできた牛馬とひとつ屋根の下に暮らすという農村の生活形態が、その土坑の用途も含め、いつから始まりどのように変遷していくかという興味深い問題を解明していく貴重な資料となると思われる。

(坂倉一光)

註

- ① 土坑が建物内土坑であるかどうかの検討及び結語の作成には以下の文献を参照した。
浅尾 哲「土坑を伴う中世掘立柱建物について」（『一般国道1号龜山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要IV』三重県教育委員会、1993年）。
- ② 伊勢野久好「馬ノ瀬遺跡の調査」（『天花寺山』一志町・嬉野町遺跡調査会、1991年）。
- ③ 南伊勢系土師器皿の分類は次の文献の分類に従つ

た。（伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、1993年）。

- ④ 伊藤裕偉「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」（『研究紀要第1号』三重県埋蔵文化財センター、1992年）。
- ⑤ 藤澤良祐「瀬戸古窯址群II—古瀬戸後期様式の編年—」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要X』瀬戸市歴史民俗資料館、1991年）。



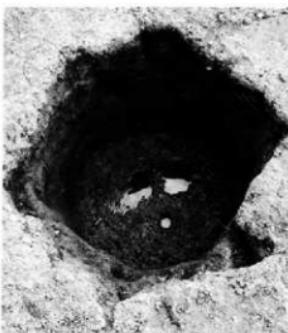
調査区全景（東から）



調査区西半分（南東から）



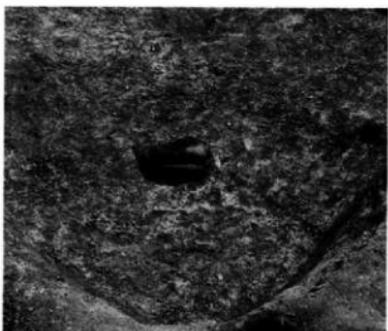
S B 45 (東から)



S K 36



S B 46 (北東から)



S B 46 土器出土状況 (北東から)



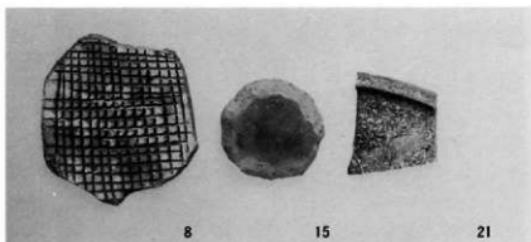
S B 47 (南から)



作業風景



1



8

15

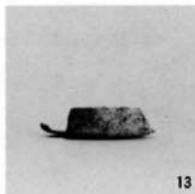
21



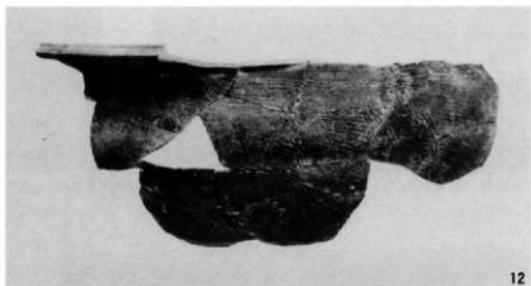
4



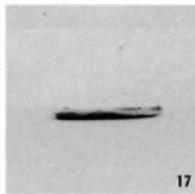
11



13



12



17



18



16

出土遺物

報告書抄録

ふりがな	はいかわにしてびいいせき(だいにじ)はくつちょうさほうこく							
書名	鯱川西出B遺跡(第2次)発掘調査報告							
副書名								
卷次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	195							
編著者名	坂倉一光・奥野 実							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503番地 TEL 0596-52-1732							
発行年月日	西暦 1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査 期間	調査 面積m ²	調査原因
はいかわにしてびいいせき 鯱川西出B遺跡	わたらいぐんわたらいちょうはいかわあざにして 度会郡度会町鯱川字西出	市町村 番号	24470 91	34° 25' 37'	136° 35' 00"	19980608 ~ 19980825	2,250	平成10年度県営 は場整備事業 (中川地区)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
鯱川西出B遺跡	集落跡	縄文時代 室町時代	掘立柱建物・土坑	石鏃・石核・剝片 縄文土器・上師器 陶器		掘立柱建物には、 南東隅に土坑を伴 う		

平成11(1999)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年10月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告195

鮭川西出B遺跡(第2次)発掘調査報告

1999・3

編集発行 三重県埋蔵文化財センター
印 刷 ㈲第一プリント社
